

非定型顔面神経痛 「いつ痛むか」重視

Q 三十一歳、女性。昨年歯科治療を受けてから、鼻から目にかけて神経痛が起りました。歯科、神経内科、耳鼻科、眼科のどこでも歯科治療との関係は不明とのことです。現在鎮痛剤と安定剤を処方されていますが一向によくならず、冷たい風にあたったり、天気の良い日、疲れのたまった日は特に憂うつです。

A 特にはつきりした因果関係がなく、顔面の神経支配と一致しない疼痛（とうつう）は、一般に「非定型顔面神経痛」と呼ばれる。「痛み」はその人でなければわからないつらさがある。

このような愁訴に対して漢方医学ではどのように対処するかというと、「どこが痛むか」も大切であるが、「どのような時に痛みが増すか」と

いう観点を重視することが特徴である。質問者の場合、「寒冷刺激」「気圧の変化」「疲労」が解決のヒントになる。

まず試みる漢方薬としては桂姜棗草黄辛附湯（けいきようそうそうおうしんぷとう）がよい。麻黄（まおう）や附子（ぶし）といった体を温め、鎮痛作用のある生薬と慢性の疲労感を晴らす作用のある生薬との組み合わせである。麻黄が胃腸にさわる人は当帰四逆加呉茱萸生姜湯（とうきしぎやくかごしゆゆしようきようとう）にする。

その他、症状の特徴に応じて、きちょうめんな性格で痛み刺激の体質の人には、半夏厚朴湯（はんげこうぼくとう）や烏薬順気散（うやくじゆんきさん）などを用いる。